

「写真、撮らせてもらっていいですか？ あ、そのまま作業してて」

冬の昭和記念公園でしゃがみこんだままルーペを覗き込んでいる女性に心惹かれて、エマは声をかけた。

てっきり植物を見ているのだと思ったが、シャッターを切りながら話を聞くと、「専門は昆虫です」と言われた。大学で研究しているのだと。

「すごいね。私はカメラの勉強してる専門学校生」

「私、写真撮ったら絶対ブレるんです」

ルーペを覗きながら大学生は答えた。なにそれ、とエマは笑った。

日が陰ってきたと思ったら、ちらほらと雪が落ちてきた。撮影させてもらったお礼をしたいと申し出ると、大学生は「いいんですか？」と驚いた様子で聞いた。

「モデルやってくれたじゃん。私、エマ」

「あ、ユウカっていいます」

昭和記念公園を見下ろせるバーで、窓辺の席に座ったふたりは、思いがけない出会いに乾杯した。

「私たちどっちもレンズ越しの世界が好きだね」とエマが言った。

「カメラ、借りていいですか？」とユウカに頼まれ、エマ

はカメラを渡した。エマはエマでルーペを借りて、右目にあてて微笑んでみせた。ユウカがシャッターを切った。撮影したデータをその場で見てみると、ピントはばっちり合っていた。

「奇跡だ」とユウカは目を丸くした。

「クリスマスだし」とエマは笑った。「奇跡も起こるよ」その写真が思いがけないプレゼントにも思えて、ふたりはまた乾杯した。

Precious Time with Friend

Message
